〈論　説〉

衣の社会経済史（Ⅰ）
——19世紀ロンドンの古着流通——

友　松　憲　彦

目　次

はじめに
1．労働者家計の衣料費
2．労働者と古着
3．古着の供給と流通
小括

はじめに

本稿は19世紀イギリス都市労働者の日用生活品の流通機構研究の一環として衣服を取りあげる(1)。

従来，都市労働者の生活品の歴史的研究は，社会史や生活史といった分野で扱われてきたが，問題意識はさまざまであり，また事実認識も十分ではなく，いまだ断片的知識の集積の域を超えていない。衣服についても然りである。これまで服飾史といえば上流階級のそれが尚古研究者や好事家の関心の対象になる程度であったが，近年，中流階級の服飾に関しては優れた社会史研究がみられるようになった(2)。しかし労働者階級についてはほとんど未開拓であり，労働者や下層民がどのような衣料を身につけていたかといったプリミティブな問題についてさえ，われわれの知識は意外なほど貧弱であることに驚かされる。確かに，イギリス工業化のリーディング・セクターであった繊維工業には汗牛充棟の成果があるが，川北稔の指摘のように，それらは生地（布地）の生産や流通の研究であり，衣服に関する研究ではない。生地は縫製加工されない限り衣服にはなりえず，さらに衣服の流通が解明されな

ければ，衣料消費の実態に迫ることはできない。最終消費財である衣服の生産や流通の解明が，流通史ばかりでなく社会史や生活史研究の立場から要請される所以である(3)。

衣服史は労働史研究にとってもまた重要な課題である。工業化はハウスホールドを解体し，労働者の妻たちを家庭内職業労働から解放する。家族成員は外部の雇用機会を捉えて賃金を獲得し，賃金で購入した財やサービスに依存するようになり，消費単位としての家族が成立する。これは妻たちが家政上の技術を喪失し，家事サービスの商品化が促進される契機となる。労働者生活の重要な一環である衣生活においても，生地を購入して自ら衣服を縫製することから，「商品としての衣服」すなわち「出来合い服」の購入と消費へと移行する。出来合い服（古着や既製服）の生産や流通は，工業化にともなう労働者生活（労働力再生産）の変容の一側面を表示するものとして，労働史や家族史の研究にも関わる課題を提起しているが，その実態はほとんど未解明であるといわざるをえない。

本稿は工業化により形成されたイギリス都市労働者の再生産基盤の一端を明らかにする作業として，19世紀ロンドンの古着流通を分析する。

1．労働者家計の衣料費

19世紀衣料史の展望を得るために，最初に労働者家計の衣料費の長期動向をみておきたい。この点に関する信頼できる自系列データはもとより存在しない。断片的数値は労働者家計調査から得られるが，労働者は衣料を施しやおさがりや慈善に依存することも少なくなく，また農業労働者は収穫期に，都市貧民は就業機会が多く臨時収入に恵まれ燃料費が不要になる夏季に衣料を買う傾向があったので，週単位の家計調査には衣料費が記載されないことも多い。そこで議論の糸口を労働者の実質賃金に求めることにする。

産業革命期労働者の「生活水準論争」の中心的争点である実質賃金研究が地域的，階層的な事例研究に拡散するなかで，全国レベルの指数作成の積極的試みとして注目されるのがクラフツ（N. F. R. Crafts）とリンダート（P. H.

表1　実質賃金と一人あたり実質個人消費の年間増加率

（単位：%）

時　期	(a)「ベスト・ゲス」実質賃金	(b) 一人あたり実質個人消費
1760 - 1800	- 0.17	0.25
1780 - 1820	0.56	0.47
1820 - 1850	1.27	1.24
1780 - 1850	0.88	0.80

（出典）N. F. R. Crafts, The New Economic History and the Industrial Revolution, in P. Mathias and J. A. Davis eds., *The First Industrial Revolutions* (1990), p.40.

Lindert）＝ウィリアムソン（J. G. Williamson）による「ベスト・ゲス」実質賃金（表1・a）である。これと「一人あたり実質個人消費」（表1・b）の関係をみると，1780-1850年の全肉体労働者（blue collar worker）の「実質賃金」の動向は「一人あたり実質個人消費」の全般的増加と軌をほぼ一にしており，1820年以前の増加は緩慢であったことがわかる[4]。

18世紀末から19世紀初期の古典的産業革命期には「一人あたり実質個人消費」の増加率は停滞しており，それが上昇傾向を示すのは1820年以降であった。しかし消費改善の大半は食生活に向けられたとみられ，衣料消費が顕著に改善された兆候は乏しく，逆に19世紀中葉まで労働者衣料が劣悪であったことを示す記述史料には事欠かない。若干の事例を示せば，1830-50年にスコットランドの手織布工家族の多くは，「所得があまりに低いので履き物や衣服を買う余地は残されていない。」1820年代半ばのボウルトンの綿織布工も賃金が低下し，「みすぼらしい衣服のために礼拝に参列できない。」ヨークシャーの梳毛織布工は「パンが安いときに衣服を買った。」不況から回復した1843年でさえ，リバプールのアイルランド出身の一般労働者の子供のほとんどは裸足であり，学校に着ていく服どころか街路で見せるだけの衣服をもっていなかった[5]。

衣料消費が上昇に転ずるのは，食品消費と同じく「飢餓の40年代」後半ないし1850年代，さらに本格的増加は19世紀末からと推測される。その点

を裏づける若干の数値がある。労働者家計支出に占める衣料費の比率は，エイサ・ブリッグス（Asa. Briggs）とシュミーチン（J. A. Schmiechen）によると，1845年の6％，1890年8～9％，1904年12％であった。60年間で2倍であるが，これは同期間に労働者階級所得がほぼ倍増したことを背景にしていた[6]。しかし初期の上昇は急激ではなく，上昇率は1845-1890年の45年間が2～3％に対して，1890-1904年の14年間が3～4％で，上昇が急角度になるのは19世紀末以降であった。

一方，マッケンジー（M. A. Mackenzie）の作成した連合王国の1860年，1800年，1914年の所得分位が①「下位から10分の1」②「下位から4分の1」③「中間」④「上位から4分の1」の家計の衣料費は，ブリッグス＝シュミーチンの数値ほど改善していない。この数値は実際の家計データではなく，夫婦と就学児3名の家計を想定し，概算所得，主要食品の小売価格，食料品の輸入量と国内生産量から作成した仮設的なものであるが，1860-1914年の衣料費は4～7％の範囲にあり，ブリッグス＝シュミーチンのいう1890年以降8％以上ということはない。また1860年から1880年までは上昇するが，それ以降1914年までは低下しており，20世紀初頭まで一貫して増加したのでもない（表2）。

与えられたデータから推測する限り，衣料費が増加傾向をみせるのは19世紀中葉からであり，それが顕著になるのは19世紀第4四半期（大不況期）である。輸入食品価格低下による実質賃金上昇，衣料慈善事業の増加，ブーツや衣服クラブの普及などの諸要因によるものであった[7]。とはいえ，労働者家計支出額の二分の一から三分の二を占めた食料費と比較すれば衣料費の比率は低く，第一次大戦期まで10％を大きく上回ることはなかったとみられる。

衣料費の動向は衣料品の流通や消費の変化に連動しているのであろうか。この点のデータも欠如するので，間接指標として服地小売商の成長をみる。センサスから作成した表3は，ロンドンの服地小売商と人口成長を比較したものある。1841年から1891年に人口増加が2.17倍に対して服地商は4.17

倍になり，対人口比も大幅に上昇している。19 世紀後半の衣料品の流通および消費量の増加を間接的に裏づけるものである。

以上，労働者衣料費と衣料品の流通および消費量のデータを検討したが，むろんこの結果には一定の限定が必要である。

第一は，提示されたデータは性別，年齢，階級や階層，職種，地域などの差を把握するうえでは限界があり，その限りで趨勢ないし傾向を示すものに

表 2　所得水準による衣料費（連合王国）

		1860 年			1880 年			1914 年		
所得水準		シリング	ペンス	（%）	シリング	ペンス	（%）	シリング	ペンス	（%）
①下位から 10 分の 1	支出総額	13	0		17	0		20	6	
	衣料費	0	9	(5.8)	1	0	(5.9)	1	0	(4.9)
		平均的な農業労働者			最上層の農業労働者			最下層の不熟練労働者		
②下位から 4 分の 1	支出総額	15	6		21	4		26	10	
	衣料費	0	9	(4.8)	1	6	(7.0)	1	6	(5.6)
		最下層の不熟練労働者			平均的な不熟練労働者			最上層の不熟練労働者		
③中間	支出総額	20	6		26	6		35	6	
	衣料費	1	6	(7.3)	2	0	(7.5)	2	6	(7.0)
		最上層の不熟練労働者			平均的な未熟練労働者			最上層の半熟練労働者		
④上位から 4 分の 1	支出総額	27	6		32	0		45	3	
	衣料費	2	0	(7.3)	2	6	(7.8)	3	0	(6.6)
		普通の半熟練労働者			最上層の半熟練労働者			熟練労働者		

（出典）W. A. Mackenzie, Changes in the Standard of Living in the United Kingdom 1860-1914, *Economica* 1, 1921, pp.227-230. より作成。

表 3　ロンドンの服地商と人口

年	1841	1851	1861	1871	1881	1891
センサスのカテゴリー	Draper Draper, Linen Silk Mercer	Draper Wollen Draper Silkmercer	Draper Linen Draper Mercer	Draper Linen Draper Mercer	Draper Linen Draper Mercer	Draper Linen Draper Mercer
実数	5,383	11,078	12,006	15,266	17,727	22,464
（指数）	(100)	209	223	284	329	417
人口指数	(100)	121	144	167	197	217
商人 1 人当り人口	348	213	234	214	216	188

指数は 1841 年＝ 100。各年センサスから作成。

すぎない点である。一例をあげれば，衣料費は必需品ではあるが食品に比べれば所得弾力性は大であり，社会的要因にも影響されて階級間の格差は大きかった。ヴィクトリア期の中流階級は「ジェントリー化」の指向のために地位の表象である衣服への支出は膨張したが，労働者は上層を除けばそうした傾向とは無縁であった。また，同じ労働者階級でも熟練労働者（労働貴族層）と一般不熟練労働者には無視しがたい格差があった。例えば，チャールズ・ブースによる1880年代後半ロンドンのイースト・エンドの労働者貧民調査から衣料費を算出すると，極貧階級（クラスB）0.9%，貧困階級（クラスCおよびD）2.8%，安楽階級のクラスEは8.4%，Fは10.9%となる[8]。稼得が不規則で週18～21シリングの一般の不熟練労働者は3%にも達しない。また，1889年の労働者支出調査では，衣料費は平均年所得28～40ポンドの家計（極貧層）が2.15%，125ポンドの家計（おそらく熟練労働者，労働貴族層）は16.0%であり，7.4倍の格差があった[9]。さらに，ロウントリーのヨークの労働者家計調査（1899年実施）でも，週総収入21シリング8ペンス未満の「第一次的貧乏」家計の支出の過半（平均51.0%）は食費であり，衣料費は平均6.3%の低水準であった[10]。19世紀後半の衣料費比率の全般的上昇のもとで，労働者の衣料消費には大きな階層間格差が内包されており，こうした事実を記述史料の分析によって掘り下げることなしには，衣料消費の実態に迫ることはできない。

第二に，衣料品の流通および消費の間接指標とした服地小売商の動向についても，労働者需要との関連が薄い商人を排除できないという問題がある。例えばマーサー（mercer）は元来なんでも売る商人の意味であり，針や糸を扱う小間物商と訳されるハーバーダッシャー（haberdasher）と区別はなかった。しかし14世紀末～15世紀前半頃から主として絹織物を扱う服地商を意味するようになり[11]，19世紀にはもっぱら高級な絹織物商を指すようになった。

ドレイパー（draper）も「毛織物商」といった狭い意味ではなく，一般にいま少し広義の服地商であり，規模の面では大都市の「モンスター・ショッ

プ」の経営者から裏通りや田舎にある小さな店まで，取り扱う生地の品質や店舗も，最高級の緞子やモスリンやショールを控え目な物腰で販売する大型店から，労働者地区で廉価品を破廉恥なテクニックで売りつけようとする安売店まで極端な幅があった[12]。このように服地小売商のすべてが労働者需要と関連していたわけではない。

第三に，実態として服地小売りをしていた商人が，「服地小売商」のカテゴリーから脱漏している可能性がある。例えば，ドレイパーは19世紀初期までは店舗商とは限らず，地方や小都市では市場開催日や歳市にやって来る巡回ドレイパー（travelling draper）やスコッチ・ドレイパー（Scotch draper）のような無店舗の巡回商人であることも多かった[13]。センサスではこれらがホーカーやペドラーのような行商人・巡回商人と捉えられていることもありうる。さらにドレイパーは生地だけでなく，ピン，リボン，糸などの小間物（small wares）から，ハンカチ，ネッカチーフ，レース，婦人帽，手袋，洋品類等の装身具（fancy goods）に及ぶのが普通であったので，小間物商に分類されている可能性も否定できない[14]。要するに当時の商人の未分化な性格を反映して，センサスの商人分類と営業実態は必ずしも一致しないことに留意すべきである。

センサスの3服地小売商のうち労働者需要との関連が最も強かったとみられるのはリネン・ドレイパー（linen draper）である。これは19世紀には「亜麻布商」という狭い意味ではなく，亜麻，木綿，絹製品等を扱う一般的な服地商であった。

以上のように，数量データから知りうるのは長期的趨勢ないし全般的傾向にすぎず，記述史料による分析の補完を必要とすることは改めていうまでもない。

2．労働者と古着

都市や農村を問わず古着は労働者や下層民の日常衣服として古くからひろく使われた。労働者の家計調査，社会調査によって古着消費の実態をみてお

こう。

最初はバークシャーのバーカム（Berkham）の教区司祭ディビス（Revd. David Davies）の農業労働者の家計調査（1789年）である。この調査での夫婦と子供3人の家計の衣服費は年3ポンド10シリングで年支出総額の11.6％，内訳けは夫1ポンド10シリング，妻1ポンド，子供1ポンドで購入品目は表4に示される。子供の衣服は購入された古着と自家製の再生服であった[15]。ただ，衣料消費にも地域差があり，後述のように南部は購入衣料への依存が高かったといわれるので，これを全国平均的とみることには慎重であるべきであろう。

古着の着用はロンドンのような大都市でとくに目立った。1790年代半ばのイーデン（F. M. Eden）の労働階級調査は，衣料調達方法の地域差を指摘している。イングランド中部および南部では，労働者は衣料の全部ではないが相当部分を小売店から購入している。北部では労働者ばかりでなく借地農や職工もほとんどの衣料品（靴と帽子は除く）を店では買わず生地を購入して自分で作っており，自家製衣料への依存度が高い。一方，首都近郊では労働者が新しい衣服を購入することはまれであり，上流階級が廃棄した通常5シ

表4．農業労働者の年間衣料費（1789年）

夫		
	シリング	ペンス
衣服一揃い	5	
仕事用の上着と半ズボン	4	
シャツ2枚	8	
頑丈な鋲靴1足	7	
靴下2足	4	
帽子，ハンカチ等	2	
計	30	0
妻		
ガウン，ペティコート	4	
シャツ1枚	3	6
丈夫な靴1足	4	
靴下1足	1	6
エプロン2枚	3	
帽子，ハンカチ等	4	
計	20	0
子供（3人）		
子供の衣服は（通常は）親の古着を材料につくられたり，古着が購入される。衣服購入費は子供3人までは1ポンド以下ではない。3人以上では1人あたり7シリング追加。		
計	20	0
総計	70	0

D. Davies, *The Case of Labourers in Husbandry Stated and Considered* (1795), pp.8-19. より作成。

リング程度で買える古着，着古しのチョッキ，ブリーチズ（breeches）[16] で満足しており，妻は子供服を作ったり縫ったりする以外，衣服を仕立てることはほとんどない[17]。

このように古着は労働者衣料の不可欠の部分であり，都市とりわけロンドンを中心に流通量は相当な規模に達した。しかし専業の古着商は多くはなく，仕立屋が古着や再生服を扱ったり，衣料品とは関係のない商人，手工業者，サービス業者が古着売買を手がけることもまれではなかった。また，古着商が新しい衣服を売る場合もあり，「古着商」には複雑な多面的性格がつきものであった。

古着商の分布は全国的であったが，とくに内陸交通の拠点，外国市場への輸出港，人口密集地などに多く，18 世紀末にはロンドン（およびミドルセックス），デボンシャー，ケント，ハンプシャーが活動拠点であり，ウィルツシャー，バークシャー，グロスターシャー，ランカシャー等も重要であった。古着はローカルな流通にとどまらず，全国的流通から海外輸出におよんだ。頂点には大商人も出現し，最大級の古着商は在庫に千ポンドないしそれ以上の保険を掛ける者もいたが総じて小経営であった。ベヴァリ・ルミアの研究によると，1776-1787 年にサン保険会社およびロイアル・エクスチェンジ保険会社の保険契約簿（insurance register）に記載された古着商 799 人のうち，衣服の在庫（あるいは在庫と信託品）の価値が千ポンドを上回ると記載されたのは 83 人にすぎない。最大規模の古着商は需要の中心地であり流通拠点でもあったロンドンに圧倒的に集中しており，エドワード・スミス社（ハウンズデッチ）の在庫古着の評価価値は 1786 年には 2820 ポンドに達した。しかし保険契約簿に記載されたのは一握りの上層商人であり，その背後には保険を掛けられない多数の零細商人がおり，末端では泥棒が非合法に入手した衣服が質屋を経由して流通するというのが古着売買の実態であった。

古着商の零細性や多面性はとくに地方で顕著であった。地方の狭隘な市場条件のもとでは専業経営は困難であり，古着は他の商品と組み合わせで売買されるのが一般的であった。最も多かったのが新しい衣服と一緒に古着を売

るというやり方である。仕立屋は古着を直して再販売することも多く，帽子屋，靴下屋，コルセット業者，手袋屋，靴屋，洋品屋，マンチュア製造業者（mantua-maker）も一方では新しい製品をつくり，他方では古い品を販売した。熟練職人や食品等の調達商人が本来の営業と古着の買い入れや販売を結合している場合もあった。例えば，車大工，桶屋，金や銀の細工師，時計屋，バックル屋，籐椅子業者のような熟練職人，また保存食品，魚，ベーコン，小麦粉，タバコ，果物，香水，金物，ガラス，陶器および一般的な家庭用品の小売商も古着を取り引きした。さらに宿屋，居酒屋，床屋の店主が古着売買に関与することもあった。古着取り引きは高度な熟練や経験を必要とせず，新規参入に対する障壁は低かった。こうした古着商の複雑な性格は，前近代化社会だけでなく工業化の初期段階まで一般的であった[18]。

18世紀末からの工業化の本格化による綿工業や他の繊維工業の飛躍的発展は，大衆の衣料消費のあり方を大きく変化させた。周知のように，イギリス綿工業は原料を全量輸入しただけでなく，製品の海外市場依存度も高く，綿織物の輸出比率は19世紀前半で50～60%，世紀後半には70～80%に達し，一貫して国際的性格の強い工業であった。しかし同じ時期に綿織物の国内消費量も大幅に増加しており，1819-1821年の3560万（重量）ポンドが1880-1882年には2億50万ポンドと60年間に約5.6倍になっている[19]。同じ期間のイングランド・ウェールズの人口増加は2.2倍程度であるので，綿織物の1人あたり消費量が飛躍的に増加したことは明らかである。

機械生産により安価となった木綿は，テーブルクロス，ナプキン，カーテン等とともに，大衆消費市場で労働者や一般庶民の安手の衣料の生地として広範に普及するようになった。1851年工場制度の礼讃者ポーター（G. E. Porter）は，1820年からの25年間に綿製品価格は65%下落し，綿製品の消費者は増加の一途を辿ったとしたが，数字の信憑性はともかく，綿製品価格の下落と消費量増加の関係は明らかである。

木綿が大衆衣料の素材として広く普及したことは，エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）にも記述されている。

大都会の「労働者の衣服は大多数の場合極めて粗悪な状態にある。」衣服の素材は男女とも木綿が一般的であり，毛織物やリンネルはほとんどない。男子労働者のシャツは漂白されるか染められた綿製品で，婦人服も同じように木綿のプリント製品である。男たちの着ているズボン，上着やコート類はファスチアンか，またはその他の重い木綿でつくられている。ファスチアンの衣服は労働者の「制服」（costume）として知れわたっており，労働者は「ファスチアン・ジャケットと呼ばれ，またそう自称もしているが」，それは中流階級が毛織物を着用したのでブロード・クロスと呼ばれたのと対照を成している。寒冷多湿で天候が急変するイングランドでは，中流階級は素肌のうえに柔らかい起毛織物のフランネルを身につけ，フランネルのスカーフやシャツを着用するのが普通である。しかし「労働者階級はこうした用意がないばかりでなく，そもそも一本の毛糸を衣服につかうことさえほとんどできない。」たとえ労働者が日曜日に着る毛織物の上着を買うことがあったとしても，それは安物店で購入された「悪魔のちり」（devil's-dust）と呼ばれる粗悪な服であった。それは「着るためではなく，売るために作られたもので，2週間もすれば裂けたり，糸目がでてくるような」代物であった。それらを利用しないとすれば，労働者は着古した，なかばすり切れた中古の上着を古着商で買わねばならないが，古着は寿命をすぎており，数週間しかもたないようなものであった。」[20]

ファスチアンは本来，亜麻と綿の交織のことであったが，この頃にはコーデュロイ，モールスキン，ベルベットといった重い綿布を指すようになった。労働者の着るファスチアンの服は毛織物の仕立て服にはほど遠く，粗雑に裁断された生地を縫い合わせた程度のもので，パッド入れ，蒸気加工，仮縫い，芯入れ等はされず，色も黄褐色や黄色，茶，青などに限定された。また，職種に固有な労働服もあり，鉱夫は粗いフランネルの服を着ていた。ロンドンの生鮮食品の街路商人コスターモンガーは，広うねのコーデュロイのチョッキとあぜ織り布（cable cord）のズボンが「制服」であったが，これらも木綿地である[21]。工業化は木綿の大衆的普及をもたらしたのである。

一方，工業化は出来合い服＝「商品としての衣服」の需要も増加させた。

前工業化社会では家族は生活の基本単位であり，同時に生産の単位であった。家族は住み込みの徒弟や使用人を含む「ハウスホールド」であった。工場制度の発達はハウスホールドを解体し，妻たちを家庭への緊縛から解放する一面があった。労働需要の増加に対応し，妻たちは夫の低賃金を補充し，収入増加をはかるために家庭外賃金労働に積極的に進出する。それは妻たちが家政上の機能や技術を喪失し，家事サービスの商品化を促す契機となる。裁縫という家事労働は放棄され，出来合い服が購入されるようになる。とりわけ人口移動よって急膨張したロンドンでは，下層労働者の給源は移入民であり，労働者家庭は当初からハウスホールドではなく消費単位としての性格が強く，出来合い服に対する需要は潜在的に大きかった。

既製服の起源は16世紀から17世紀初期にスロップ（slop）とよばれた仕事着とされるが，1840年代に至ればかなり大規模な既製服業者も出現した。しかし労働者にとって衣服は依然として貴重品，贅沢品であり，増加した所得の多くは食生活の向上にむけられた。1860年代以降，既製服はオーバーコートやインド旅行やハイランドのハイキング用の旅行服といった特殊な用途から次第に一般的な労働者服に広がっていった[22]。しかし既製服が労働者階級全体を捉えるには，実質賃金の一段の上昇が必要であり，また価格が下層労働者の購買力の射程にまで低下することが不可欠であった。

この2条件が整うのは1870年代以降といえよう。とりわけ苦汗労働制度と結合したミシンの普及は，既製服の生産費と価格を劇的に低下させた。1850年から1900年にかけてシャツの生産費は4分の1に低下した[23]。19世紀中葉に安物既製服屋でズボンは9シリング6ペンスから1ポンドしたが，ミシンの普及後は，作業用ズボンと粗悪な上着の2点が10シリング6ペンスで購入できた。この時期に急増したホワイトカラーは，リンネルではなく木綿の既製シャツを素肌にまとっていた[24]。1870年代までには伝統的に家庭で縫われていた木綿下着も機械（ミシン）製の既製品に代替された。一般労働者が賃金で木綿の既製服を購入するという衣生活が確立するのはこの段階である。したがってその時期まで，下層労働者の「出来合い服」需要

を充足するうえで重要な役割を担ったのは古着であった。富裕階級が廃棄したり慈善として施した古着や再生服の需要は，工業化の本格的進展にもかかわらず減少せず，むしろ増加する傾向がみられたのである。「もしここ25年の統計が得られれば……重要な取り引きのなかで，古着の売買くらい大きく取引量を伸ばしたものはないことがわかるかもしれない」[25] とは，19世紀中葉ロンドンの労働者や貧民のルポルタージュで知られるメイヒューの証言である。

労働者や貧民への古着の普及は外国人には強烈な印象となって焼き付けられた。1860年代末期，イングランドを訪問したフランスの文学者イポリット・テーヌ（Hippolytet Taine）のロンドン下層民の衣服についての観察である。

> 「ぼろぼろの衣服を着ている人は四人も五人も着古したものを身につけているが，それを見ると私の心はいつも痛む。それは自分を卑しめることであり，そうしたものを着ることで，自分が社会の落伍者であることを自他ともに認めているのだ。フランスでは農民や職人や労働者は（自分とは）違った階級であるが，決して劣等な人間ではない。私の服が自分のものであるように，彼らの仕事着や上っ張りは彼らのものであり，彼ら自身のほかにそれを身につけた者はいない。ぼろをそんなにやすやすと着るのは，たんに風変わりなことではすまされない。それはしかるべきプライドの欠如を示すもので，貧民はこの国では他人に踏みつけられるのに任せているのだ。」[26]

古着の普及をイングランド下層民のプライドの欠如に帰着させることはできないであろう。民族衣装が民族の同一性や帰属を表示するように，一般に衣服には人間のアイデンティティの保持という意味がある。職人や労働者が職種に固有の衣服を着ることは，集団の秩序に服し，システム内部の存在であることを相互に確認することである。農村共同体の崩壊によって農村を去り，都市に流れついて下層民となった者に固有の衣服がないのは当然のことである。フランスでもそうした人たちの「制服」が古着であったことは，イ

ングランドとなんら変わらない[27]。テーヌの目に映じたのは，ロンドンに集積された下層労働者や貧民の多さ，職人組合的組織の外側に置かれた者が生みだす膨大な古着需要であったというべきであろう。

19世紀末から第一次大戦期に至っても古着には根強い需要があった。例えば，1899年に実施されたロウントリーのヨークの労働者家計調査は，賃金生活者の「生活標準」をAからDの4クラスに分け概略を述べているが，Bクラス（主として不熟練労働者。週平均家族収入19シリング9ペンス）の衣料消費について，一家庭を事例に具体的に説明している。

夫の就業は安定的であり，週収入20シリングのうち18シリングは妻にわたし，残り2シリングから自分の衣服代を捻出している。一方，妻は新しい衣服を手に入れれば数年間着ている。ふだん着は安売り慈善バザー（jumble sale）で数シリングで買った古着である。ときには，富裕な家庭が売り払った上着をボロ屋（ragman）から二束三文で買うこともあったが，それも現金で払うのではなく，ボロ切れや数本の骨をやってそれと交換するのである。こうして買った上着を注意深くバラして洗濯し，子供の衣服をつくりあげる[28]。

ロウントリーは全戸調査のほかに18家計に限定してさらに詳細な個別調査を実施している。週総収入26シリング未満の第一類の家計にみられる事例である。

> 労働者（No. 1　家族数7）：「家族はいろいろな方面から，よく古着をたくさんもらう。安物の新調品よりも長い期間（おそらくは）着用する。また，父親は，自分で子供の靴を修繕してやる。」[29]
>
> 軍人未亡人（No. 3　家族数6）：「ミシンを持っていて器用に，衣服を縫ったり，縫い替えたりしている。また，彼女はあちこちから古着をもらってためている」[30]

第一次大戦直前の1909-13年，ランベス（ロンドン南部）の31労働者の家計調査を実施したモード・ペンバー・リィーベス（Maud Pember Reeves）が

発見したのも同様の事実である。調査対象となったのは下層の労働者ではなく，週 18 ～ 30 シリングの安定した賃金を得るまじめで堅実でリスペクタブルな労働者であった。しかし衣料費は全体として少額であり，衣服への支出は驚くほどの長い間隔でしか現われてこない。衣服は必要に迫られてようやく購入される財であった。しかもそれは「二度目の古着だけでなく，四度目ないし五度目の古着であることも多かった。」(31)

大不況期に上昇した実質賃金は，不況が終了する 1890 年代後期から第一次大戦前夜にかけては下落し深刻な貧困が出現した。古着需要が依然として下層労働者や都市貧民の一部に根強く残存したのは，この時期の所得分配の不平等の拡大と無関係ではなかった。

3．古着の供給と流通

（1）古着の供給

古着需要の増大に供給はどう対応したのか，この点についてはまずヴィクトリア期の家事使用人の増加という事実に注目したい。

周知のように，19 世紀イギリスの労働力構成上の特徴の一つは家事労働者の比率が高いことである。中流階級の増加によって地位の表象である家事使用人の需要が激増したからである。もちろん中流階級のすべてがそれを雇えたわけではない。19 世紀中葉，家事使用人を 1 人雇える年収の下限は 200 ～ 300 ポンドとされたが，銀行員，事務員，店員のような中流階級下層でこの年収に達する者は少数であった。その年収水準を満たしたのは大まかにいって中流階級の上層以上であった。

ブリテンの「家事・部門」の労働人口は，1831 年 90 万（総労働人口の 12.6 %），1871 年には 180 万（同 15.3%）となって農業人口を上回り，1911 年には 260 万でピークに達した(32)。家事労働は不熟練労働者にも参入容易な部門であり，とくに農業部門から排出された女子労働力の重要な就業先であった。1851 年には婦人労働者（15 歳以上）の 37% にあたる 102 万 7 千が家事労働者であり，1911 年には 212 万 7 千（婦人有業者の 39%）と最大の労働人

口になった。ロンドンの家事労働者も，1861年19万（同38%），1891年には23万8千（同32%）に達した[33]。20世紀に入ると状況は変化し，1920年代以降家事労働者は減少の一途をたどる。第一次大戦による徴兵の拡大が男子労働者を労働市場から退場させ，その補充として婦人が産業労働者へ編入されるようになるからである。

家事使用人には性別，年齢，経験により多くの職種があり，待遇や賃金にも大きな格差があった。住み込みで最低限の食と住は提供されるので一般に賃金は低く，重労働と従属性からして有利な職業ではなかった。19世紀中葉の年収は，召使頭（butler）50ポンド以上，従僕（footman）は容貌や経験により20～40ポンド，料理人（cook）20ポンド程度，家政婦（housekeeper）25～30ポンドであったが，一般的な女中（maid）は10～16ポンドにすぎなかった[34]。1867年の婦人労働者平均年収（連合王国）は20ポンド程度であるので[35]，女中は平均をはるかに下回る低所得であった。このため家事使用人は低所得の補充として，慣習的にさまざまな「臨時収入」(perquisites)を享受していた。来客が手渡すチップがその代表であるが，料理人や家政婦が商店主から食料購入額の5%程度の手数料を受け取ったり，家人が捨てた衣服を貯めておきボロとしてクズ屋に売る特権が認められていた。台所の使用人が残飯を売ることもあった。その他，広範におこなわれていたのが雇用主からの古着支給である。女中のなかで最も地位の高い侍女（lady's maid）は女主人の着古した衣服をもらえる特権があった。古着は使用人が着用する場合もあったが，かなりの部分が戸口に現れる古着商に売り払われたり，古着屋に持ち込まれた。そこには盗品も相当混入していたといわれる。

ヴィクトリア期家事使用人の貴重な労働記録であるロンドンの女中ハナ・カルウィック（Hannah Cullwick）の日記（1871年6月15日）の一節である。

> 「昼食後，がらくたの入った引き出しをひっかきまわしてボロになった服をかき集め，お店に持っていった。全部で5ペンスで売れたので，5パイント半のビールと1週間分のお茶代になる。こうしたものは自分でまかなっている。」[36]

古着商が買い取った衣服は修繕されて売られたり，そのまま古着市で売却された。古着市としてはイズリントンの牛馬市場で金曜日に開催される市や，ローズマリィ・レイン（Rosemary Lane）の西の端，タワー・ヒルの近くにあったボロ市（Rag Fair）が有名である。ぼろ市の起源は17世紀とされるが，18世紀初期には相当な規模に成長し，マーケット規模はペチコート・レインを上回るといわれた。1770年に書かれた一文書の記述である。

「（ローズマリィ・レインは）古着やあらゆる書類の衣類の売買で有名である。それは一般にはボロ市とよばれている。朝からロンドン中を歩き回って買い集めたものを持って毎日午後にそこに集まってくるおびただしい数のユダヤ人を見るのは驚きである。」(37)

ローズマリィ・レインは1850年ロイアル・ミント・ストリート（Royal Mint Street）と改名されたが，後述のように1843年近隣に「古着取引所」が開設され，一方で市のもたらす交通障害，騒音等の「生活妨害」（nuisance）のために公的規制の対象になり，次第に衰退して20世紀初期には消滅した。

市場に放出された古着の流通拠点として重要な役割を果したのが質屋である。質屋は庶民金融機関として，またパブとともに労働者コミュニティの核として，都市化と歩調をあわせて19世紀に急成長した。1796年，カフーン（P. Colquhoun）は質屋通いの習慣がロンドン貧民に「猛烈にひろがっており」，かりにそれが禁止されれば何千人もの人が路頭に迷うとしている(38)。1830年代に免許のある公認の質屋は全国（スコットランドを除く）に1537店，そのうちロンドンには380店（約25%）あり，質入れ件数は年500万～600万件に達した(39)。このほかに古着屋，雑貨屋，廃品回収業者などがもぐりで営業する無免許の質屋（イングランドではドーリィ・ショップ dolly shop とかリービング・ショップ leaving shop，スコットランドではウィー・ポウンズ wee pawns とよばれた）が多数あったので，実態はさらに大きい金融機関であった。

質屋が「黄金時代」を迎えたのは19世紀後半であり，1870年から1914

年にグレイト・ブリテンの質屋業の免許数は3390から5084へ，質入れ件数も1億5千万から2億3千万へ50%以上増加し，人口一人あたり質入れ回数も年平均5～6回に達した[40]。20世紀初頭ロンドンについては，質屋業界誌から得た信頼できる数字として，王立取引所の半径10マイル以内に692店，一店あたりの質入れ数は月平均5千点，全店では年4152万点，人口1人あたり年6点以上とされる。しかもこれには10ポンド以上の質草は含まれないので，実際にはこれを上回る取り扱いがあった[41]。質屋の利用者は圧倒的に労働者であった。1869年リバプールの30店の質屋の調査では質入れの95%以上は労働者のもので，各店の質入れ件数は年平均47175であった。これらの証拠から，グレイト・ブリテンの労働者家族は少なくとも2週間に1度，年平均30回を超える質入れをしていたとの推定がある[42]。

不熟練労働者や下層民の質屋の利用度が高かったのは，それが低賃金や雇用の不規則性を切り抜ける日常的な生活技法であったからである。日曜日に着るよそ行き（sunday suit）を月曜に入質して生活費を手にいれ，賃金が払われる土曜日に請け出して糊口をしのぐことは，経済的必要を満たすと同時に，よそ行きをスラム街の自宅ではなく質屋に保管できるという利点もあった。こうした顧客に対応するため，質屋の倉庫の一階には，1週間のサイクルで質入れと請け出しを繰り返す質草を保管する専用室（weekly pledge room）があることが多かった。

労働者の質物で最も多かったのは衣類であり，1870年のリバプールの調査では50%以上が衣類で，毛布，シーツ等が続いた[43]。質草のうち請け出されなかった（質流れ）品の比率の正確な統計はないが，一般に半分程度といわれ，また不況期には増加したと予想される。最も弱い人たちは免許のある質屋では取らない安物の生活品を入質するために，質草の鑑定は厳しくないが高利息の無免許の質屋を利用せざるをえず，それだけに質流れ率は高くなった。1860年代ロンドンのドーリィ・ショップでは，2～3ペンスの貸付けで利息は一週間に半ペニー，4～6ペンスで1ペニー，9ペンスで1ペニー半，1シリングで2ペンスであり，以下，貸付けが1ペンス増えるごと

に利息は2ペンス増加し，5シリング以上の貸付けはしなかった。利息は週に17～25%という高利であり，1～2週間の利息滞納で質草は没収された[44]。1872年「質屋法」で規定された法定利子率は，10シリング以下の貸付では2シリングごとに一ヵ月半ペニーであり，それに質札料金半ペニーを加えても無免許の質屋よりはるかに低く，質草が質流れになるまでの期間も合法的質屋は12カ月7日と利用条件に大きな格差があった[45]。

1872年「質屋法」では，請け出しされなかった10シリング以下（一般の衣服のほとんどが該当）の質草は一定期間（12カ月7日）の経過後に質屋が売却できた。ロンドンのストランドの老舗質屋アッチンバラ（Attenborough）は1870年に質流れ品の特売店を開業したが，ほとんどの質屋は店舗の一角で販売した。20世紀初頭ロンドンでは，質流れ率は20～33%程度であり，没収された品は質札の15～20%低い価格で商人に払い下げられた[46]。

10シリング以上40シリング以下の質草は，同じ法定期間の経過後，オークションが義務づけられた。しかし実際に売れるまでは請け出しもでき，競売価格が貸付け額を上回れば入質者は差額を請求できた。ロンドンにはジョンソン・ダイアモンズ（Johnson Diamond）と1813年創業のデベナム・ストウ（Debenham Storr）に競売場があり，毎週開催されたが，競売品の大きな部分を占めたのは古着であった。もっとも競売品は比較的高価で，古着というよりはアンティークであり，労働者の衣服は少なかった[47]。

質屋には盗品や乞食が物乞いで集めた古着も持ち込まれた。古着は質屋の店頭に並べられたり，古着卸売商に払い下げられたり，古着市で売り払われて市場に環流し，質屋を循環拠点とする流通機構が形成された。

（2）古着取引所（中央卸売市場）

1840年代になると古着流通量の増加に伴い古着市（ぼろ市）に代わる卸売市場の必要が高まり，古着取引所（The Old Clothes Exchange）が開設され，古着の輸出商，再生販売商，小売商，呼び売り商人等への中央卸売市場の機能を担うようになった[48]。

古着取引所は労働者・貧民地区イースト・エンドのホワイトチャペルに，ロンドンの中央市場では最も新しく1843年に開設されたが，それは近接する二つの施設から構成された。最初に建てられた第一の施設の方が重要であり，開設者＝所有者のルイス・アイザック（Lewis Isaac）にちなみ「アイザックの古着取引所」とよばれた（地図④）。ハウンズディッチ（Houndsditch）の脇道にあり，幅100フィート，奥行は70フィートの粗末な施設で，売場を雨露から守る程度のもので，屋台も仕切りもむき出しの板で壁にもいっさい装飾はなかった。

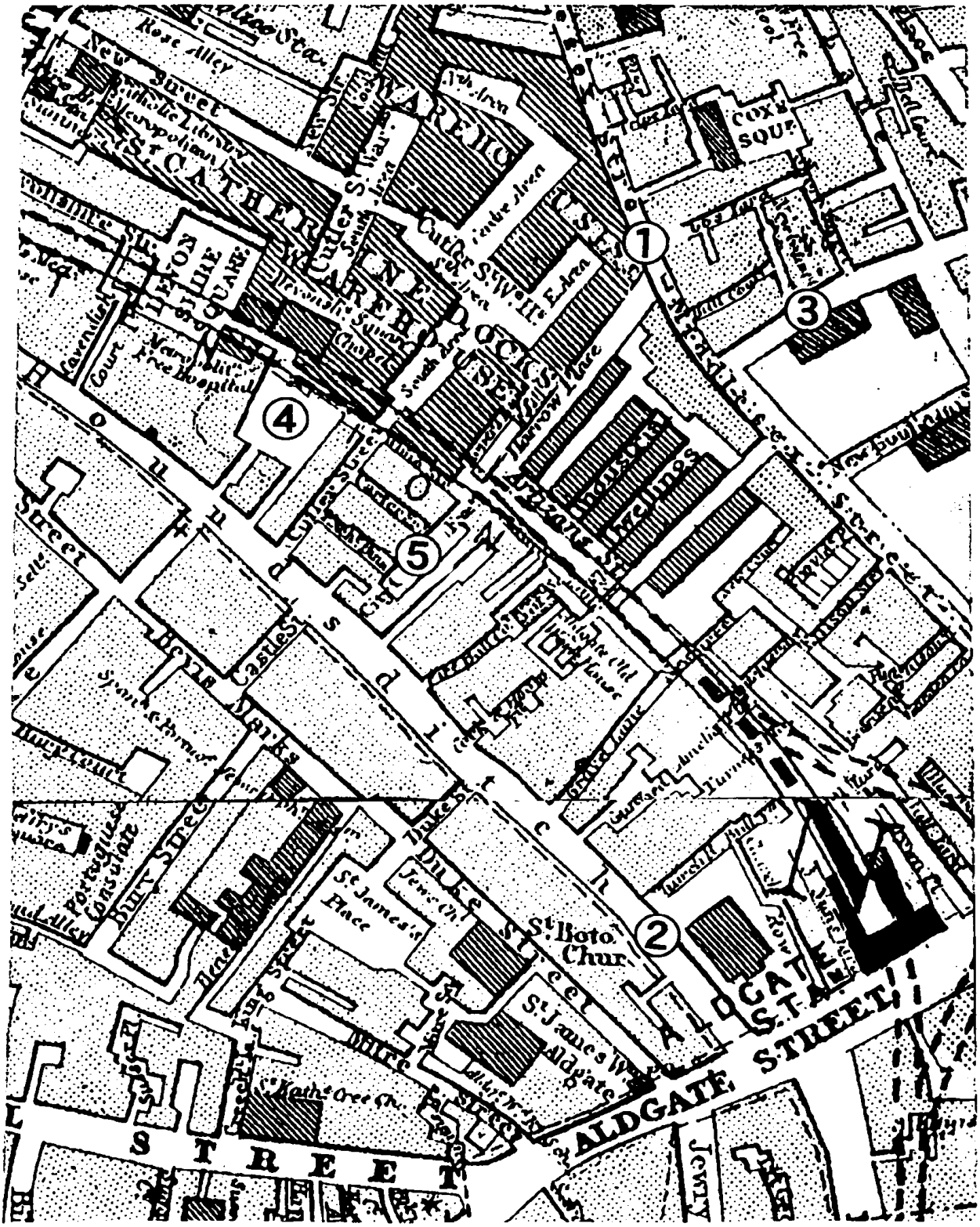
「アイザックの取引所」には卸売り部門と小売り部門があった。卸売り部門は毎日営業しており機能は明確に区分されていた。あるコーナーは古着をそのまま売る商人への卸売り専門であり，90の屋台（平均6平方フィート）が並んでいた。市場参加者は仲買商であり，仕入れた古着を地方の卸売商や小売商に卸したり輸出する中間商人であった。他方，面積がその三分の二程度の別のコーナーは，古着を洗濯，修繕，仕立て直しのうえ販売する小売商への卸売りを専門とした。

一方，小売り部門は誰でも利用でき，大量仕入れから帽子1つ靴片方だけを買うこともできた。市場参加者は古着を再生・販売する小売商であった。卸売り部門が毎日営業に対してこちらは土曜日が休業日であった。古着小売商の圧倒的多数がユダヤ人であり，土曜日がユダヤ教の安息日であったからである。

この施設からわずか数ヤードはなれたカトラー・ストリート（Catler Street）の脇道に第二の施設があった。北側は路地沿いにセント・カサリン・ドックの倉庫が建ち並んでいた。一般には所有者にちなみ「シモンズ・アンド・レヴィ古着取引所」（Simmons and Levy's Old Clothes Exchange）とよばれた（地図⑤）。やや細長い建物であり，面積は第一の施設と大差なかった。質流れ品専門の卸売市場で午前中だけ営業したが，午後には小売商に屋台が開放された。

古着取引所の歴史的歩みについて詳細は不明であるが，史料的にはこの施

ホワイトチャペル西部



New Large-Scale Ordnance Atlas of London & Suburbs, Edited and Published by George W, Bacon (1888).

①ミドルセックス・ストリート　②ハウンズデッチ　③ウェントウォース・ストリート
④アイザック古着取引所　⑤シモンズ・アンド・レヴィ古着取引所

設が所有者を替えながら1890年代まで存続したことは確認できる[49]。

古着取引所で仕入れられた古着はさまざまなルートで国内外に流通した。市場所有者ルイス・アイザックの議会証言によれば，良質の古着はフォーストーラー（forestaller）とよばれる仲買商によりオランダ，アメリカ，アイルランドに輸出された。輸出先としては19世紀前半はアイルランドが重要であり，輸出額は年8万ポンドに達した[50]。19世紀末の古着輸出や制服卸売業はユダヤ人商人の支配下にあり，ハウンズデッチやマイノリィズ（Minories）を拠点としアフリカ輸出が中心であった[51]。既製服の普及により国内需要は減少し，古着は植民地市場に捌け口を求めたのである。国内流通にまわった古着は業者により裏返し再生されたり，帽子や子供のジャケットにつくりかえられた。古靴はノーザンプトンの製靴業者に売られつくり直された[52]。

（3）古着小売商

前述のように古着小売商と仕立屋や既製服商の境界は曖昧で，仕立て服や既製服をつくりながら一方で古着を再生販売する商人もおり，その相違は明確ではなかった。スロップセラー，クロウジャー，クロウズ・セラー，アウトフィッター等は一般に既製服商の呼称とされるが，彼らが古着の再生や流通に関わることも多かった[53]。

また，営業形態も多様で，古着小売商には固定店舗商だけでなく，マーケットや路上で営業する屋台商や露天商もおり，街路を呼び売り行商する者もいた。例えば，19世紀中葉ロンドンには古着を金ではなく陶器と交換する夫婦づれの商人がおり，非の打ち所がないジェントルマンの衣裳は紅茶食器一式と，古上着は砂糖つぼと，すり切れたズボンはミルクジョッキと交換された。重い陶器と古着の袋を持って一日15マイルも歩く重労働であったが，上着は4ペンスから11ペンス，ズボンは4ペンスから8ペンスの売値がつき利幅は大きかった。さらに利益が大きかった取引きは，古着と観賞植物の交換であった[54]。

ヴィクトリア期ロンドンの古着取引の中心地は，シティの東，ロンドン塔の北，現在のリバプール・ストリート駅周辺であった。古着取引所を挟んで東にペティコート・レイン（1832年ミドルセックス・ストリートと改称，地図①），西にハウンズデッチ（地図②）が北西から南東に数百メーターの距離でほぼ並行しており，この二本の街路に囲まれた地域一帯であった。また，ハウンズデッチの南端につながるマイノリィズや，テムズ河沿いに東西に延びるローズマリィ・レイン（1850年ロイアル・ミント・ストリートと改称）も古着商が集中した地域であった。

ペティコート・レイン（Petticoat Lane）は，15世紀にはホッグス・レイン（Hog's Lane）といわれたが，17世紀初頭には古着商人が増加しペティコート・レインとよばれるようになった。1665年ペスト流行後，富裕階級の流失とユグノー織布工やユダヤ商人の流入が続き，18世紀中葉までには商業センター機能は確立しマーケットが形成された。1832年名称変更され公式にはミドルセックス・ストリートとなったが，ペティコート・レインの旧名はその後も広く使われた。ヴィクトリア期にはあらゆる種類の中古品とくに古着取引で有名な最大のストリート・マーケットの一つであった(55)。

フランスの社会主義者フロラ・トリスタン（Flora Tristan）は，1839年のイングランド調査研究旅行後に著した『ロンドン散策』（*Promenades dans Londres*, 1840）にペティコート・レインから受けた強烈な印象を書き記している。

> ペティコート・レインは，「ほとんど道が狭くて，馬車一台も通れないくらいなのである。だが，この街の表情は（さびれた）アイルランド人地区のそれと，まるで違っていた。……人間が多すぎて通行できないくらいなのである。空気が欠乏して，息が詰まりそうだった。その上，この商人の街は街全体が活気を帯びていた。男も女も，皆同じ一つの表情，金銭欲に燃えた表情をしているのである。皆が，同時にしゃべっている。ある者は売りたい商品を自慢するために，ある者は買いたい商品を買いたたくために。それは叫び声であり，言い争いであり，野卑な呼びかけであり，聞き取れないほどの喧

噪であった。私たちはそこで古着の山を見た。そのボロはあまりにも強烈な悪臭を放つので，私たちは吐気腹痛に見舞われながら，この下水溜を去らねばならなかった。」(56)

1840年代末から50年代初期の状況はメイヒューによって活写されている。

「ペティコート・レインそのものは狭くて長い通りで，ここを上から見下ろしてみると，通りの両側にも路上にも，さまざまな色の衣服がずらっと並んでいるのが見える。多彩な色といい，人ごみが絶えず動いたり小さなグループに別れたりする様子といい，なかなかみごとな光景である。……燕尾服，フロック・コート，厚地の大外套，制服に森番用のコート，ゆったりした外套，婦人用上着，ズボン，ベスト，ケープ，厚手ウールのコート，仕事着，肩掛け，帽子，部屋着，毛編みシャッといったものがすべて並んでいる。……こういった衣服が，水玉模様や縞模様の女性の服の色と混ざりあって，世界中のどの大都市に行っても見られない，いや世界中どこにいっても見られない光景を見せている。」(57)

古着小売店とともに路上や屋台で古着を売る街路商人，呼び売りの行商人のような無店舗の零細商人も集まってマーケットが形成され，店舗とストリート・マーケットが渾然一体となった労働者や下層民のショッピング街が形成された。ぼろ市のあったローズマリー・レインもそうした地域として有名であった。古着，ブーツ，靴，帽子，カサも路上に並べられたり，山積みされたり，屋台や手押し車に載せられ，見栄えのする古着は物干しにかけて展示され，活発な交換や販売が路上でおこなわれた(58)。

表5は『ケリーの郵便局ロンドン人名録』(*Kelly's Post Office London Directory*) によって，19世紀後半（1856～1896年）のミドルセックス・ストリートの衣料関係の小売店数をほぼ5年間隔で追ったものである。若干の点を指摘しておこう。

第一に，商店総数に占める衣料関係の小売店の数は，最高でも28.3%（1866年），最低では10.0%（1876年）と意外なほど少ない(59)。このストリートの

小売店の圧倒的多数は食品関係であった。したがってトリスタンやメイヒューが描写した衣料商人は屋台や路上で営業する商人であり，古着取り引きの主たる担い手は無店舗商とみられる。

第二に，『人名録』でクロウズ・ディラー，クロウジャー，クロウズ・セールズマンがどのように区別されているかは不明であるが，クロウジャーは既製服製造も兼業する比較的大きな既製服商を指す場合が多かったようである[60]。一方，クロウズ・ディラーはそれよりも小経営の衣服商で，古着商はこれに分類されたと推測される。それを前提にすれば，古着商（クロウズ・ディラー）は1870年代以降衰退し，対照的に既製服商（クロウジャー）が80年代後半から台頭している。ミドルセックス・ストリートとならぶ衣料関係商店街であったハウンズデッチでも，1870年代以降古着商は消滅している。19世紀第4四半期には古着の店舗小売商は衰退し，他方，既製服商は小売商と卸売商に分化しつつ急速な発展を遂げた。

もっとも「既製服商」の実態については，一定の留保を要することは前述のとおりである。既製服商と古着商との境界は明確ではなかった。例えば既製服商とされるクロウズ・セラーは，新しい既製服を仕立てる一方，古着を仕入れて洗濯や修繕をして販売することもあった。また小さな仕立屋や大都市の苦汗労働作業場（sweatshop）から衣服を買い入れて販売することもあったが，ロンドンの苦汗労働作業場から購入した衣服の多くは再生服であった。またクロウジャーやアウトフィッターという用語も，19世紀にはスロップや再生服の取り引きに付きまとう不名誉な烙印を取り除くために使われたので，実態は再生服商のこともあった[61]。

次に屋台商や行商形態の古着商の動向をみよう。センサスから作成した表6では，1841-1891年に「行商人・街路商人」は全国（イングランド・ウェールズ）では約4倍に増加したが，ロンドンでは2045から11944へおよそ5.8倍になっており，ロンドンへの集中度も上昇している。古着の「行商人・街路商人」も同じように増加したのであろうか。センサスのカテゴリーから古着商だけ分離はできないので，この点を別資料によって検討しよう。

表5　衣料関係店舗商（ミドルセックス・ストリート）

年	1856	1861	1866	1871	1876	1881	1886	1891	1896
army clothier（卸）									
button seller									
cloth cap maker	1		2	2					
clothes dealer	1	3	2	1					
clothier			2	1	1	1	4	3	5
clothier（卸）								6	6
clothes salesman									
draper							1		2
furrier	1	1	1			1		2	
haberdasher				1	1	1		1	1
hatter	3	2	2	2	1				
lead merchant	1	1	1	1					
linen draper									
linen warehouse									1
milliner	1								1
outfitter									
outfitting warehouse									
rag merchant	3	2	1					1	
silk mercer									
skinner	1	1	1	1					
slopseller									
staymaker									
tailor	2	2	1		1	1	1	2	3
tailor' trimming seller	3	3	2	2	2	2	1		

衣料関係商店数（a）	17	15	15	11	6	6	7	15	19
商店総数（b）	87	58	53	60	60	59	48	69	70
(a)÷(b)×100　%	19.5	25.9	28.3	18.3	10.0	10.2	14.6	21.7	27.1

Kelly's Post Office London Directory の各年から作成。

その手がかりとして，ロンドン州議会の委員会報告書（1893年）によって，マーケットの一定の場所（ピッチ pitch）で営業する屋台商の動向をみておこう。報告書によれば，1893年にロンドンのストリート・マーケットは総数106，可動式屋台（movable stall）と手押し車（barrow）の総数は5290であり，その15%程度は店舗付設の屋台である。したがって実際の屋台商は総数の85%の約4500と推定される。1901年の継続調査では6442に増加している。同じような調査はその後実施されていないが，1930-1年には「免許のあるピッチ」（licensed pitch）が10492，ある代表的マーケットでは繁忙日にその80%で屋台が営業したので，そこからロンドンの屋台商を約8千とする推定がある[62]。1893年から1930-1年にかけて屋台商はおよそ3500（約44%）増加しており，ストリート・マーケットは成長力を維持していたことになる。首都警察のペドラーの証明書の年平均発行数も，1900-10年4721，1911-21年4128，1922-31年7220と同じ傾向を示している[63]。

では古着の屋台商も同じように増加したのであろうか。表7はロンドンの106ストリート・マーケットのうち12の主要マーケットの屋台と手押し車の商品別分類を示す[64]。これによれば，「古着・中古品」は1893年88（全体の4.8%）から1930-31年90（同3.4%）へほとんど増加しておらず，屋台総数に対する比率も低下し，明らかに衰退の傾向を示している。一方，新し

表6　行商人・街路商人の成長

	年	1841	1851	1861	1871	1881	1891
	センサスのカテゴリー	Huckster Hawker Pedlar	Hawker Pedlar	Hawker Pedlar	Hawker Pedlar	Huckster Costermonger Street Seller	Hawker Costermonger Street Seller
ロンドン	実数	2,045	3,723	4,070	8,070	8,564	11,944
	指数	(100)	182	199	395	419	584
全国	実数	14,662	25,747	21,792	44,617	47,111	58,939
	指数	(100)	176	149	304	321	402
ロンドンへの集中度	%	13.9	14.5	18.7	18.1	18.2	20.3

全国とはイングランド・ウェールズ。指数は1841年＝100。各年センサスから作成。

表7　主要12ストリート・マーケットの商品別屋台数

		1893年		1930-31年		増加率(%)
		実数	%	実数	%	
食品等	野菜・果物	522	28.8	617	23.5	18
	花	100	5.5	44	1.7	▲56
	魚	177	9.7	118	4.5	▲33
	肉類・保存食品・タマゴ	229	12.6	206	7.8	▲10
	菓子・アイスクリーム・コーヒー・ケーキ	119	6.6	169	6.4	42
	計	1,147	63.2	1,154	43.9	0.6
食品以外の日用品	衣類	231	12.7	892	33.9	286
	家具	179	9.9	148	5.6	▲17
	本・絵・玩具・ゲーム	59	3.2	168	6.4	185
	古着・中古品	88	4.8	90	3.4	2
	薬・日用品	112	6.2	179	6.8	60
	計	669	36.8	1.477	56.1	121
総計		1,816	100.0	2,631	100.0	45

（出典）LSE, *The New Survey of London Life & Labour*, Vol. III(1), 1932, p.326. より作成。

い「衣類」は231から892へ286%と全商品で最高の増加率を示し，構成率も12.7%から33.9%へ大幅に上昇し，全商品中で最多数の地位を獲得している。ストリート・マーケットは伝統的な生鮮食品や古着の小売市場から，新しい「衣類」の市場に変貌したといえよう。

これまでの検討を総括すれば以下のようになる。19世紀末から20世紀30年代にかけてロンドンの無店舗商は増加し，ストリート・マーケットは成長を続けた。しかし古着流通量は減少し，古着の屋台商は衰退の傾向を辿った。一方，同じ時期に，新しい「衣類」を扱う屋台商は急速に増加し，全屋台商の三分の一を占めるまでになった。また，従来圧倒的に多かった生鮮食品の屋台商も減少し，ストリート・マーケットは伝統的な生鮮食品や古着の小売市場ではなく，新しい「衣類」（既製服）の流通機構に性格変化を遂げつつ成長を持続した。

以上，ロンドン最大の衣料小売市場であったミドルセックス・ストリートと12主要ストリート・マーケットの分析から確認しうることは，古着の店

舗商は19世紀第4四半期から減少し，無店舗商も19世紀末から1930年代には衰退の方向を辿り，一部の下層労働者や貧民の需要を別にすれば，古着は労働者服としての重要性を失うということである。この古着流通機構の衰退および労働者衣生活の変化を，既製服の生産や流通との関連で分析することは今後の課題となる。

（4）古着業と移民

最後に古着商の出自について検討しておく。一般に街路商人や行商人のような無店舗零細商人は失業者の吹き溜まりであったが，古着商の有力な供給源は外国移民であったことに特徴がある。

18世紀末から19世紀初期には，東ヨーロッパおよびドイツ系ユダヤ人移民が主要な供給源であった。母国で「ユダヤ的」商工業以外の経済活動を法的に禁止されていた彼らは職業技術的熟練を有さず，ギルド規制下のロンドンの伝統的手工業の多くは非キリスト教徒の徒弟を拒否し，キリスト教徒の家庭での家事奉公も宗教的理由から困難であった。残された途は相互扶助のためコミュニティを形成し，独自の救貧組織や産業資金援助に依存して生きのびることであり，熟練を要さず零細資本で参入可能な古着小売業は恰好の職業であった。古着業は悪徳のイメージ（盗品や故買品を扱うことからくる）のために一般からは忌避される日陰の職業であり，それゆえにユダヤ人に開かれた職業であった。そしてユダヤ人の参入は，反ユダヤ主義と結びついて古着商のイメージをさらに悪化させた。

19世紀中葉ロンドンのユダヤ人古着商はおよそ千人に増加したが，その後減少に転じ，500～800人程度まで後退した。1840年代後半の「大飢饉」により流入したアイルランド人が，薄利や過酷な労働を苦ともせず古着小売業に参入したからである。しかしアフリカやアラブ諸国への古着輸出業は，19世紀末まで一貫してユダヤ人商人の支配下にあった(65)。

ユダヤ人移民の第二波が到来するのは19世紀末である。1881年アレキサンドル二世暗殺後，ロシアや東欧から迫害を逃れて大量のユダヤ人がイギリ

スに流入し，1880年代前半にイースト・エンドだけで2万に達した。彼らは古着業をはじめさまざまな街路商業に流入し，古着業でのユダヤ人商人の支配力はふたたび高まった。古着業の中心地であったミドルセックス・ストリート，ウェントウォース・ストリート（地図③）周辺は住民の95%以上がユダヤ人の地区が広がっていた(66)。

表8はイングランド・ウェールズ在住外国人（ヨーロッパ出生）のうち，「コスターモンガー・ホーカー・ストリート・セラー」を職業とする者を1891年センサスでみたものである。上位からイタリア，ロシア，ポーランド（ロシア系），ドイツ，オーストリアと続く。職業の性格上パートタイムの就業者も多く，センサスは行商人や街路商人の一部を捉えたものにすぎない。「不明確で雑多な職業」にロシア人7043，ポーランド（ロシア系）人7227が分類されているが，そこにはパートタイムで古着業に従事する貧民が多数含まれていたとみられる。表9のように，ロシア人，ポーランド（ロシア系）人に最も多かった職業は仕立屋（テーラー）で，既製服の仕立や縫製も移民の就業先として重要であった。国内外からの絶えざる人口流入によって膨張した19世紀ロンドンでは，古着売買や苦汗労働制度下の既製服の縫製加工は，資本や技術の低位性のために，移民のような最下層の不熟練労働者に貴重な就業機会を提供したのである。

移民とともに増加を続ける無店舗商は店舗商の脅威となった。納税者である店舗商は，無店舗商（非納税者）により営業利益が侵食されることを理由に行政に圧力をかけ，街路商業を規制しようとした。さらに，ユダヤ人商人は土曜日（ユダヤ教の安息日）に休業し，キリスト教の安息日の日曜日には営業したために，英国国教会との宗教的摩擦を誘発した。1840年代後期から70年代に高揚した国教会の福音主義（Evangelicalism）は，来世の準備として現世の生活倫理を重視し，禁欲的自己修養とりわけ日曜礼拝式や日曜学校への出席を強調する「安息日遵守運動」（Sabbatarian movement）として展開されたが，日曜日のマーケットの喧噪はそうした宗教活動への深刻な妨害と認識されたのである。こうして19世紀中葉，教区会によるマーケットの

規制が各地で強行された。

ペティコート・レインやサマーズ・タウンのブリルなどのマーケットが教区会により規制されたが，結果は期待に反するものであった。街路商人の排除は集客力を低下させて店舗小売商にも打撃を与え，一方，1870年代後半

表8　外国人の行商人・街路商人（1891年）

イタリア	990
ロシア	342
ポーランド（ロシア系）	239
ドイツ	110
オランダ	72
オーストリア	50
フランス	42
ベルギー	5
スェーデン	4
ノルウェー	2
デンマーク	1

イングランド・ウェールズの Costermonger, Hawker, Street seller の合計。
1891年センサスより作成。

表9　イングランド・ウェールズ在住外国人の職業（1891年）

	ロシア	ポーランド	ドイツ
School teacher, master Professor			1,981
Merchant service, Seaman Pilot, Boatman on Seas	593	2,325	2,833
Baker			2,340
Tailor	4,960	5,611	2,489
Costermonger, Hawker, Street seller	342	239	110
General labourer	98	126	592

1891年センサスより作成。

からの宗教・信仰の全般的退潮[67]のなかで福音主義も後退し，規制圧力は次第に弱まった。こうして19世紀第3四半期に一時的衰退をみせたマーケットは，世紀末には蘇生の傾向をみせた。1889年ロンドンのドック労働者ストライキにみられる「新組合主義」と「社会主義の復活」に直面して，マーケットの日用品の低価格供給や就業機会提供の機能を行政側が社会政策的観点から評価したこともマーケット復活の一因となった[68]。しかしこの段階になると，ストリート・マーケットでの古着取引きは減少し，既製服の売買が中心となった。労働者の「出来合い服」需要は古着から既製服に移行し，ストリート・マーケットは安手の労働者用既製服の小売市場に性格変化を遂げたのである。

小　括

以上，史料的制約もあり十分ではないが，これまでの検討をまとめて結びに代えたい。

工業化はハウスホールドを解体して通勤型労働者を成立させ，家族は外部で獲得した賃金で購入した商品に依存するようになる。家族は消費単位となり，家事サービスは外部化され，衣生活も自家製衣服から出来合い服へと移行する。とりわけロンドンのように人口移動により急成長した都市では，下層労働者の給源は国内外からの移入民であり，労働者家族は当初から消費単位としての性格が強く，出来合い服の潜在的需要は旺盛であった。しかし工業化初期の実質賃金上昇は緩慢であり，しかも機械（ミシン）が最終消費財生産を捉えるに至っていないために既製服は廉価ではなく，品質も粗悪なために消費拡大には一定の限界があった。労働者の出来合い服の需要を充足したのは既製服ではなく，上流階級が廃棄したり手当として支給した古着や再生服であった。

19世紀ロンドンの古着流通機構は，都市人口の急増とともに自然成長的に勃興したストリート・マーケットであり，露天商，屋台商，呼び売り行商人のような無店舗商が流通の担い手であった。古着流通は貧民や不熟練労働

者の出来合い服需要を満たし，下層民とりわけアイルランド人やユダヤ人移民に貴重な就業機会を提供するという二重の意味で，都市下層民の再生産を支える役割をはたした。

一般労働者の衣生活が古着から既製服に本格的に移行するのは19世紀第4四半期（大不況期）からである。安価な輸入食品の増加による実質賃金上昇，ミシンの普及と苦汗労働制度が結合して既製服価格が劇的に下落するこの段階に至れば，古着は一部下層民を除けば使用されなくなり，出来合い服の中心としての地位を失う。しかしストリート・マーケットや無店舗商は衰退したのではなく，安手の既製服の流通機構に性格転換を遂げつつ都市下層民の日用品流通機構として生命を維持した。

最後に，これまで論じたのは労働者下層ないし都市貧民の衣服であり，賃金生活者である点で実態は労働者でありながら社会通念上は「下層中流階級」(lower middle class）に位置づけられ，また自からもそれを指向したホワイトカラー層の衣服については，ヴィクトリア期の特徴である中流階級のスノビズムと関連させて，個別の検討を必要とすることを指摘しておきたい。

〔本稿は第3回イギリス流通研究会（2000年12月22日，生協総合研究所）での発表に加筆，修正したものである。〕

注

（1） 食品流通については，拙著『近代イギリス労働者と食品流通』晃洋書房，1997年。

（2） A. Hollander, *Sex and Suits* (1994)，中野香織訳『性とスーツ』白水社，1999年。坂井妙子『ウェディングドレスはなぜ白いのか』勁草書房，1997年。戸矢理衣奈『下着の誕生－ヴィクトリア朝の社会史－』講談社，2000年。中野香織『スーツの神話』文芸春秋，2000年。

（3） 川北稔は衣料史研究を(1)生地の生産の歴史，(2)衣服の流通の歴史，(3)衣服の消費の歴史に三分したうえで，従来の研究は(1)に集中してきたが，それも技術，経営面に関する研究で，加工，染色，デザイン等は無視してきたとする。(2)の衣服の流通は「ほとんど解明されてはいない」とし，近年まで

庶民衣料として重要であった古着流通の分析が不可欠としている。望田・野村・藤本・川北・若尾・阿河編『西洋近現代史研究入門』（増補改訂版）名古屋大学出版会，1999年，334頁。また，川北稔編『歴史学事典1，交換と消費』弘文堂，1994年，の「フッション」の項（草光俊雄稿）も参照。

（4） N. F. R. Craft, "British Economic Growth 1700-1831 : Review of the Evidence" *Econ. Hist. Rev.*, 2nd. Ser. Vol.XXXVI, No.2, 1983, p.197.

（5） J. H. Treble, *Urban Poverty in Britain 1830-1914* (1990), pp.181-182.

（6） J. A. Schmiechen, *Sweated Industries and Sweated Labor, The London Cloth in Trades 1860-1914* (1984), p.13.

（7） Treble, *op.cit.*, p.182.

（8） Charles Booth , *Life and Labour of the People in London*, 1st. ser. Vol.1, (1902-4), p.138. より算出。

（9） *Labour Statistics: Returns Expenditure by Working Men*, P. P. 1889, LxxxIv, p.30. in W. H. Fraser, *The Coming of The Mass Market 1850-1914* (1981), op.cit., p.59. 徳島・友松・原田訳『イギリス大衆消費市場の到来』梓出版社，1993年，71頁。

(10) S. Rowntree, *Poverty, Study of Town Life*, 2nd.ed. (1901). p.290. 長沼弘毅訳『貧乏研究』千城，1975年，262頁。この階層に1465家族（7230人）が属するが，それはヨーク労働者の15.7%，ヨーク全人口の9.9%にあたる。

(11) G. Unwin, *Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1904)，の邦訳『ギルドの解体過程』（樋口徹訳）岩波書店，1980年に付された原語＝訳語索引27頁参照。

(12) D. Alexander, *Retailing in Engrand during the Industrial Revolution* (1970), pp.135-136.

(13) J. B. Jefferys, *Retail Trading in Britain 1850-1950* (1954), p.292.

(14) 逆にハーバーダッシャーも狭義の「小間物商」ではなく，14世紀末頃からは刃物類，服装品，ガラス・陶器類，錫や白鑞製の食器類のほかに，フランスの毛織物（friezes），フランドルのカージー織，絹物といった生地も扱った。Unwin, *op.cit.*, 前掲邦訳，原語＝訳語索引24-25頁参照。19世紀にはプリント・モスリン（printed muslins）やスコットランド亜麻布（scotch cambrics）を売るのも普通であった。Alexander, *op.cit.*, pp.129-130.

(15) D. Davies, *The Case of Labourers in Husbandry Stated and Considered* (1795), pp.8-19. in E. R. Pike, *Human Documents of Adam Smith's Time* (1974), pp.170-177. より算出。

(16) ブリーチズとは男性用の半ズボンであり，ウエストと膝にボタンがけされ，

ボタンのしたの膝の部分にはバックルが付いていた（紐で結ぶこともあった）。

(17) F. M. Eden, *The State of the Poor* (1897), Vol.I pp.554-555.

(18) B. Lemire, "Peddling Fashion : Salesman, Pawnbrokers, Taylors, Thieves And The Second-Hand Clothes Trade in England, c.1700-1800," in J. Benson and G. Shaw eds., *The Retailing Industry* (1999) pp.347-350.

(19) T. Ellison, *The Cotton Trade of Great Britain* (1886), pp.58-59.

(20) 一條和生・杉山忠平訳，岩波文庫，上，137-139 頁，訳文は一部変更。

(21) Fraser, *op.cit.*, p.60. 邦訳 72 頁。

(22) *Ibid.*, p.63. 邦訳 77 頁。

(23) Schmiechen, *op.cit.*, p.24.

(24) 中野香織，前掲書，165-166 頁。

(25) H. Mayhew, *London Labour and The London Poor* (1864), Vol.II, p.30.

(26) L. C. B. Seaman, *Life in Victorian London* (1973), p.81. 社本・三ツ星訳『ヴィクトリア時代のロンドン』創元社，1987 年，89 頁。訳文は一部変更。

(27) G. Lefranc, *Histoire du travail et des travailleurs* (1975)，小野崎昌裕訳『労働と労働者の歴史』芸立出版，1981 年，191 頁。北山晴一『おしゃれの社会史』朝日新聞社，1991 年，120-131 頁等を参照。

(28) Rowntree, *op.cit.* pp.84，邦訳 64-65 頁。

(29) *Ibid.* p.311. 邦訳 281 頁。

(30) *Ibid.* p.318. 邦訳 290 頁。

(31) M. Pember Reeves, *Round About A Pound A Week*, rept. (1988), p.62.

(32) P. Deane and W. A. Cole, *British Economic Growth 1688-1959* (1969), pp.142-143.

(33) 前掲拙著，5 頁。

(34) Fraser, *op.cit.*, p.21. 邦訳 27 頁。

(35) Seaman, *op.cit.*, p.143. 邦訳 164 頁。

(36) M. Hiley, *Victorian Working Women : Portraits from Life* (1979)，神保・久田『誰がズボンをはくべきか』ユニテ，1986 年，235 頁。

(37) W. Harrison, *A New and Universal History, Description and Survey of the Cities of Lodon and Westminster* (1770), p.549. in H. Pollins, *Economic History of the Jews in London* (1982), p.66.

(38) K. Hudson, *Pawnbroking, An Aspect of British Social History* (1982), p.41. 北川信也『質屋の世界』リブロポート，1985 年，38 頁。

(39) *Ibid.*,p.46. 邦訳 72-73 頁。

(40) P. Johnson, *Saving and Spending: The Working-class Economy in Britain*

1870-1939 (1985), p.167. 真屋尚生訳『節約と浪費』慶應義塾大学出版局，1997年，141頁。

(41) R. Sims, *Living London* (1903),Vol.II, pp.36-37.

(42) Johnson, *op.cit.*, p.168. 邦訳140頁。

(43) Johnson, *loc.cit.*

(44) Mayhew, *op.cit.*, p.122.

(45) Hudson, *ibid.*, pp.150-156. 邦訳251-259頁。

(46) Sims, *op.cit.*, Vol.II, p.41.

(47) M. Ginsburg, "Rags to Riches: The Second-Hand Clothes Trade 1700-1978," *Costume*, No.14, 1980, p.126.

(48) 古着取引所については，Mayhew, *op.cit.*, pp.30-31.

(49) ちなみに『郵便局人名録』*Post Office London Directory* に「アイザックの古着取引所」は65版（1865年刊行）まで，「シモンズ・アンド・レヴィ古着取引所」は92版（1891年刊行）まで記載されている。

(50) Ginsburg, *op.cit.*, p.124.

(51) Booth, *op.cit.*, 2nd ser., Vol.3, p.64.

(52) Alexander, *op.cit.*, pp.75-76.

(53) *Ibid.*, pp.138-140.

(54) Ginsburg, *op.cit.*, p.125.

(55) B. Weinreb and Christopher Hibbert eds., *London Encyclopedia* (1983), p.594.

(56) Flora Tristan, *Promenades dans Londres* (1840). 小杉・浜本訳『ロンドン散策』法政大学出版局，1987年，194頁。

(57) Mayhew, *op.cit.*, p.44. 植松靖夫訳『ロンドン路地裏の生活誌』原書房，上，219-220頁。

(58) *Ibid.*, pp.45-46.

(59) メイヒューも「この地域で売買されているのは古着だけとは思わないでいただきたい」(*Ibid.*, p.43.) として食品や雑多な日用品の街路商人，行商人，小売店に言及している。

(60) 例えば1840年代最大の既製服商（兼製造業者）の一つであったモーゼス社は『郵便局人名録』には，wholesale clothier とか wholesale & retail clothier, tailors & outfitters と記載されている。

(61) Alexander, *op.cit.* pp.138-139.

(62) LSE, The *New Survey of London Life & Labour*, Vol.III (1), 1932, p.291.

(63) *Ibid.*, p.324. より算出。

(64) 12主要ストリート・マーケットとは，Berwick Street, Leather Lane, Chapel

Street, White Cross Street, Hoxton Street, Brick Lane, Wentworth Street, Watney Street, Chrisp Street, Lambeth Marsh, East Street, Southwark Park Road。1893年のロンドンのマーケット総数106に対して，サンプル数12は過少な印象を与える。しかし全マーケットの「古着・中古品」の屋台と手押し車は220，12主要マーケットのそれは88で全体の40%を占める。12マーケットの動向から全体の趨勢を推し量ることはこの点から許容されよう。

(65) Ginsburg, *op.cit.*, p.125.

(66) J. White, *Rothschild Buildings, Life in an East End Tenement Block 1887-1920* (1980), pp.4-5. Map 1.

(67) この時期の宗教的特徴として，チャールズ・ブラッドリーの宗教的自由主義運動，理性主義の普及による知識人の聖職離れ等があげられる。

(68) 前掲拙著，140-146頁。